
青い空と彩る心

御嶋 千音

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

青い空と彩る心

【Nコード】

N1358M

【作者名】

御嶋 千音

【あらすじ】

突然現れた男は、母が画策した見合い相手だった！母への反発心で健介を弾く蓮美だが、次第に…

1・母と私と見知らぬイケメン

「嫌よ！絶対嫌！お見合いなんて3億積まれてもしない！」

『そんなこと言っていないで、あんたももう29なんだから。だいたい、彼氏の一人も一度だって連れて来たことのないあんたが悪いんだからね。』

何を勝手なことを言ってるんだこのオバハンは！私のためじゃなく、ただ世間体のためだけにこんな話を持ち掛けているくせに！

そう電話口に怒鳴れば、どんなに楽かと思うが、そこからまた始まる言い合いに想像だけでも辟易し、ぐっと言葉を呑み込んだ。

『ご近所の人にも、蓮美ちゃんももう29歳ですよねお付き合いされてる方でもいらっしゃるんですかってストレートな嫌味言われて、お母さんかってストレス溜まってるの。』

やっぱりそうだと、腸が煮えくり返るの我慢しながら、マジギレ寸前の声で反論する。

「そんなこと勝手に言わせておけばいいでしょ！？私は結婚なんてしたくないの！仕事だってちゃんとしてるんだから余計なことしないで！」

『余計なことって、お母さんはあんたのために、』

そこまで言った母の言葉に、はつきりと頭の中の何かがプツン切れるのを感じた。

「私のためなんかじゃないでしょ！？」

勢いに任せて、私は乱暴に携帯の電源ボタンを押した。そしてそのまま、携帯は折り畳み、ソファアーの上のクッションにおもいきり投げつけた。

頭に昇り切った熱は下がることなく、やがてそれは涙へと変わった。

——いつからか、母と口論した後は必ずといっていいほど、私は涙を流すようになった。それは、自分への憐れみか、母への怒りか、それとも他の何かなのか定かではないが、少なくとも私の中の冷めた心を刺激する感情であることに間違いはなかった。

母・和美は子どもの目から見ても現実的な人間だった。が、勿論それだけではなく、それにプラス、世界の中心は自分正しいのは自分といわんばかりの意志の持ち主であった。蓮美は私立の大学の文学部を卒業している。社会に出てからは、一人暮らしを始め、親に学費を返すことを第一とし熱心に働いていた。しかしそれは、親に恩を返すなどという立派なものではなく、蓮美にしてみれば、『借りを返した』ということだった。蓮美が高校三年の時、私立大学の四年制の文学部に行きたいという旨を、両親に伝えた。まず結果を言うのなら、父は賛成。母は反対。と言った具合だった。実は、母である和美は、蓮美は高校に入学し、最初の進路希望の紙を学校から貰ってきた時、

『わかってると思うけど、大学は短大か、国公立だからね。…なんですって、うちにはそんな余裕ないでしょ？高校も私立なんだから当然でしょ。』

と、言われたことがあったのだ。勿論、蓮美は内心少しだけ傷つき、しかし母の言うことは尤もだと思った。私立の四年制の大学に通うことがごく普通の一般家庭にとって厳しいことだということは蓮美にだってわかっていた。だから、当時は短大でもいいと思っていたところがあった。そんな気が変わったのは、高校二年の夏だった。友達に連れられて行った、ある私立大学のオープンキャンパス。この頃、あまり進路に熱を持っていなかった蓮美だが、学校からもどった一つは行くようにと、中学生みたいな宿題を出され、なんとなく、話を聞いたり見学したりしていた。

そして、友達が児童教育の先生の話や間、蓮美はそんな何の興味も湧かない学部より、本も好きだし、文学部の説明を聞いてくる

という、その日初めての別行動だった。

そこで話をしていたのが、蓮美の永遠の大恩師にもなる寺田篤彦だった。それは、決して堅苦しい話ではなく、なんとなく聞いていたような蓮美でさえ、笑みが零れ、興味が湧き、急遽進路を確定しにかかるという説得力ぶりだった。

しかし、難関は母に有り。

話始めたら何時間かかるような攻防を、この母と娘は進路の話になるたびに繰り広げた。最終的には、父による沈静のもと、母が折れるという形だった。しかし、二人はそれから何かにつけて嫌味をいい、すっかりぱつと見険悪な親子になってしまった。（何が見合いただくそつ！誰が結婚したいなんて思うかバカたれ！）

蓮美にしてみれば、母親は一言で言うところ『嫌い』だった。蓮美が何をするにも、先にある利益だけを心配し、行為自体から得られることには見向きもしなかった。そんな母は、娘だけではなく、夫とも衝突することがしばしばあった。夫は元来穏和であり、普段なら妻の言うことに任せるような男だが、例えば蓮美の進路の話のときのように、決して自分の意志を押し付けることはせず、たいていは蓮美の訴えに賛同してくれる。回りくどい言い方ではあったが、蓮美の父は極端な正論家であるといえるだろう。しかし、何が正論かと、言い出したら切りがないので、そういう意味ではある意味、父も独りよがりな発言をしているともいえるだろう。

そんな父のことを、蓮美は母よりかは慕っている。しかし、両親の仲は決して悪いものではなく、バラエティー番組を見ては二人とも同じところで笑ったりもする。

傍目にみれば、蓮美の遅れてきた反抗期が、今母親にぶつけられているとも見えているであろう。

しかも、三十路手前の自分の意志もプラスされた厄介な反抗期として。

蓮美が母親と電話で口論してから、二週間ほどした日曜日の午後のことだった。いつものように部屋でゴロゴロしていた蓮美は、化粧なし、上はよれよれのＴシャツに、下は青いジーンズという出で立ちである。

「あはははっ！なんで梅干し〜！」

大好きな芸人が司会を務めるバラエティー番組を毎週見るのが、蓮美の楽しみだった。片手には缶ビールが握られ、周りには空になった缶がもう一缶あった。

そんな平和且つだらだらな休日を過ごしていると、部屋にインターホンの音が響いた。

「およ？お客さん？」

こんな昼間に珍しい、と思いながら立ち上がった蓮美の脳裏には、もしかしたら母親かもしれないという予感が浮かんだ。あの母にしてみれば珍しく、この間のお見合い電話を最後に連絡がなかったからだ。いつもなら、あと１０回は文句と説得を続けてきていてもおかしくなかったのだ。

（お母さんだつたら間違いなく喧嘩になる。…よし、確認だけして居留守しよう。）

そう決めた蓮美はテレビの電源を切り、そろりそろりと玄関の方へ歩み寄った。部屋にすることを悟られたらいけないからだ。

そのままそろりと外の様子を覗き、そこにいる人物を確認する。

（……………あれ？お母さんじゃない。）

母ではないどころか、そこにいたのは宅急便の兄ちゃんとも思えないような、人物だった。

（なんでこんなイケメンがうちを？なんか宗教の布教運動とか？）

スーツ姿ではあるがセールスマンにしては手ぶらである。蓮美の目に映るのは、細い黒髪を風に揺らし、スーツで隠れていてもその鍛えられた体躯がわかるような『イケメン』であった。蓮美の推定からして自分よりも少し上ぐらいであろうか。じーっと穴から男を観察していると、扉の向こうにいる男と目が合い、男はにっこりと微笑んだ。それに驚いた蓮美は、慌てて穴から目を離し、心臓らへんの服をぎゅっと掴んだ。

（ばれた！？…いや、穴があるから何か視線を察したのかもしれない。…びっくりした。）

そこまで考えてはつとした蓮美は、母でないのなら対応しなければと気付いた。

「ど、どちら様でしょうか…」

どもってしまった、と蓮美は自分の額に手をあて頂垂れた。その後、ドアのせいでくぐもった男の声が聞こえてきた。「佐倉蓮美さんですか？永岡健介と申します。和美さんからお話をお伺いではありませんか？」

ながおか けんすけ？
かずみ…って、和美？
え、お母さん？

お伺いではありませんと答えようかと思った蓮美だが、どうやら怪しい者ではないらしいと判断し、扉をそつと開けた。
そよ風と一緒に入ってきたのは、自然と警戒心をといてしまうような穏やかな香りだった。

「……………あの、母…からでしたら、何も聞いていないのですが、」
扉からひよつこりと顔を除かす和美に、永岡と名乗る男は微笑んだのだが、蓮美の言葉を聞き、きよんとした。

「…そう、ですか。」

ふむ、と少し考える素振りを見せると、はたと気付いたように手に提げていた紙袋を蓮美に差し出した。地元の美味しい和菓子や「花柳^{はなやぎ}」の紙袋だった。

「あ、これお土産です。よろしかったらどうぞ。」

それを目にした蓮美は警戒心を100パーセント解いた。

（あ、ああああ、これは花柳の栗饅頭！数有る菓子の中から私の大好物をチョイスしてるなんて…エスパー！？）

思わず手を伸ばしかけた蓮美だが、そうじゃないだと心の中で叱咤する。

「あの、えと、ながおかさん、でしたか？私母からは何も聞いておりませんので、このようなものを何も知らずに頂くわけには…」

本当はもんのすごく欲しいけど、という言葉は心の中にだけ留め、自分より頭一つ分ほど高い永岡を見つめる。

「ああ、それもそうですね。」

笑みを崩さないまま、スーツの内ポケットに手を入れ、ごそごそと探る仕草をする。

「……ああ、どうやら名刺を忘れてしまったようですね。すいません、また次の機会にでもお渡しします。」

次があるの？と思った蓮美だが、それは言わずに次の言葉を待った。

「——私は、貴女の見合い相手です。」

2・友とお酒と美少女オタク

「——もしもし？……あ、ああー蓮美？どうしたのいきなり……
…やだ。本当に健介君あんたのどこに行つたの？あんな不届者な娘
に、健介君は勿体ないわーって言ったのに。……え？ああ、話たん
でしょう？あの人があんたの見合い相手だった人よ。あんたが断固
反対するから、私の方から丁重にお断りしておいたの。そしたら、
健介君がわざわざうちまで来てくれて、お嬢さんに会いたいのです
所と好きなものを教えて下さいって。……え、本当に持つてきてく
れたの？花柳の栗饅頭…やだ、冗談だと思つてたから本当に好きな
もの教えちゃつたのは悪かつたわね、あんな高価なもの。で、話し
たんでしょう？いつたいどんなことを……って、あら？切れちゃつ
た。」

——という母との電話で大方理解出来た。

というか聞き捨てならないことがいくつかあるけど、まあそれは置
いて。

これに永岡さんの話もプラスすると、どうやら彼は父の取引先の会
社の人らしく、以前から懇意にしていたとか。しかも、以前私とも
会つたことがあるという（私は全く覚えていない。）

母の言う通り、確かに一度は丁寧に断られたものの、じゃあ間に人
を挟むのはやめて個人的にお付き合ひしましょうという、え、私の
意見総無視？みたいな話らしい。…というか今思えば何気に告白さ
れたのかもしれない。あ後は私の部屋、ではなく、近くの喫茶店
に入つて結果的にはプチお見合いみたいなことをしていた（外に出
るからわざわざ着替えて化粧した。めんどくさった…）

そこで私とあなたはどこで会つてるんですかと聞いたが、自分だけ
覚えてるのは癪なので頑張つて自分で思い出して下さいと笑顔で言

われた。言い返そうとも思っただけど、何を言ってもこの笑顔に説き伏せられるんだろうなとおもい、やめた。その後は私の仕事のこととか、趣味とか、休日の過ごし方とか聞かれた。休日の過ごし方についてはジャージで永岡さんを応対した時点で嘘はつけなくなったので、ジャージで一日ごろごろしてると行っておいた。というか、ほとんど私の話をしてしまったため、永岡さんに関しては年齢が32歳ということしか聞けなかった。まあ、他に興味があるわけでもないんだけど。

それに、それはそれは話上手な永岡さんにより、コーヒー一杯飲んでとつと帰ってやろうと思ってたのに、気付いたら五杯目を頼んでいる私がいた。それに気付いた私は、五杯目のおかわりをキャンセルして、あたふたと喫茶店をあとにした。

「にゃー！なんやえらい胸キュンな設定やないですか先輩！」

人の家だというのにも関わらず、缶ビールを次々と開けていくのは、蓮美の大学時代の後輩である根本すず子。文芸部時代からの付き合いの二人は、休日にはよくこうやって飲んでいる。それは蓮美の家であったり、すず子の部屋であったり、はたまた居酒屋であったりと様々である。ちなみに、すず子は物書き好きが功を奏し、現在は恋愛小説家として執筆活動を行っている。

「設定っていうな！こっちは真剣に言ってるの！」

本日四本目の缶ビールを手に持ち、蓮美は少しふらつとしてきた頭を振った。

「いやいや、この会話の30秒間で、私出会ってからハッピーエンドまで妄想しました。帰ったらそれちゃんと言文にしますから。」

余計なことを！と蓮美が言わなかったのは、すす子話した時点でこ
うなることはわかっていたからである。学生時代、すす子はサーク
ル中のメンバーに、それぞれの恋愛遍歴を聞いていた。ただ以上に
恋ばながすきな子だと思っていたら、しばらくして、すす子は大量
の自作恋愛小説を部屋に持ち込んだ。もちろんそのもとネタはサー
クルのみんなの話であり、名前こそ違えど、恥ずかしい想いをして
いる人もいた。

「……あー、でも、今回はちょっと趣向を変えてみてもええかなー」

独特の西の訛りで話すすす子はテーブルにへにゃんとうなだれ、少
し赤い頬を冷やすように頬擦りしている。すでにほろ酔い状態なす
ず子は見तेの通り、酒に弱い。

「惜しいですが、今回は私の妄想を駆使したもんやなく、先輩が行
うなままに綴ってみよかな思います。」

「は？」

「タイトルは『THE 三十路道』（ノンフィクション）」

「誰が三十路かつ！というかノンフィクションはやめて！」

「言つて先輩もあと三ヶ月で30やないですか。」

「まだ三ヶ月もあるでしょ！」

「甘いわー、三ヶ月なんてあっちゅーまですよ？もう見合い相手（
仮）で手堅く結婚したらどうですか？」

「絶対いや！」

強情やー、と酒を仰ぎつつ、すす子はテレビのリモコンに手を伸ば
した。

「あ、木田や。」

「え？あ、ほんとだ。」

画面に移ったのは、夕方の芸能ニュースである。そこに今ちょうどピックアップされているのが、『木田夏生』。二人と同じく大学のサークル時代の仲間である。すず子の同級生であり、蓮美にとって是一年下の後輩だ。

「あのオタクが、俳優とは…世も末やわー」

「……確かに。」

学生時代から、木田は重度の美少女オタクだった。しかし、アニメを見るのと同じくらいの情熱で、彼は学生の頃から俳優としてテレビドラマによく出ていた。が、そんなことは信用できる—まあ、話したところで誰も信じないが—仲間内でしか知らないことなので、世間一般は、彼をただのイケメン芸能人とは思っていない。また、大学にいた頃は蓮美が大好きなアニメのヒロインに似ていると、言い寄ったことがある。

「あー、あいつのスカした面見るとイラついてきますわー」

「…暴力はダメだよ。」

また、すず子は蓮美に言い寄った木田を天敵と見なしていて、あの頃木田はすず子のサンドバッグでもあった。

「ええんですよあんなアホは。うちのネタ箱汚されたらたまりませんからねー」

「え、ネタ箱って私？」

「29にもなつて付き合ってた男が一人って…普通に可愛らしい見た目やのに信じられへーん。」

蓮美の脳裏にはかつて恋人という存在であつた男の姿が浮かんでいた。高校三年の時に初めて出来た『彼氏』。お互い受験生であつたが、それを承知の上での交際だつた。少なくとも、蓮美からすれば、蓮美はどちらかというと淡泊なところがあり、また、相手は情熱的という言葉がぴったりの青年だつた。そのせいかどうか、勉強するから、という蓮美の言葉に、恋人は『俺と一緒にいる時間と勉強する時間、どっちが大事なんだよ!』と、聞いてはいけなことを聞いてしまったのだ。呆れた蓮美は、『勉強する時間。』と即答し、二人の関係はそこで終わつた。その期間、たつたの二ヶ月。それ以来蓮美は、大学でも社会に出てからも、いい感じになつた男性とは、友達以上に発展することはなかった。もちろん、過去のこととが原因であるといえるだろう。

「……………あ、でも別に処女やないですよね?」

「……………(古傷)」

そう、高校生の頃の恋人とは、せいぜい深い拙いキスまでだつたが、三年前の冬、飲み会で意識を失うほど飲んでしまつた蓮美は、翌朝、お約束の展開に真つ白なシーツの上で陥つていた。しかも、それからも同じようなことが4、5回あり、蓮美は半年ほど酒を断つたことがあつた。

その時の相手は、一つ年上の同じ部署の先輩で、二年前に海外支部へ異動になつた、エリートだつた。

「ほんまはその男もぶつ殺したいところですけど、まあ先輩にも落ち度はあるんで勘弁します。」

「……………どうも。」

——二人はこうしてビールを片手に過ごすことが多く、話のネタが尽きることはない。今回の永岡健介の件も、蓮美がまず子に最初

に相談したことは当然のことである。

そうして時間は過ぎていき、夜が更け、休日は終わっていった…

3 お芋と私と裏切者

「……………あー、はかどらない…」

蓮美は給湯室にて、不味いと評判のコーヒーを煎れながら目をこすった。今日は週明けの月曜日。昨日は結局すず子は蓮美宅に泊まることになり、すっかり二人で夜更かししてしまった。ちらりと時計を見ると、午後の十二時を回ったところだった。

(…お昼食べないと。)

おそらくまだお客様用布団の中で可愛い寝顔を曝しているだろうすず子を思い出しながら、蓮美はコーヒーに口をつけた。

「……………つまず、」

なんていうか、味はかろうじてコーヒーだけど、もしかしたら魚類でも粉に挽いて入れているのだろうかと思うようなコーヒーだった。午前中、蓮美は寝不足と例の件のことで頭がいっぱいで、先週の半分くらいのスピードで仕事をしていた。上司からは無言の圧力をかけられるし、隣のデスクの新人に『せんぱあい、大丈夫ですかあ？』と舌つたらずな甘ったるい声で心配された。くるくると巻かれた金髪に近い髪に、たっぷりとグロスを塗った隣のギャル新人は、どうやって就職活動をしていたのかと今更ながら心配になってしまった。

そんなところが、この会社らしいと言ったら、会社らしい。

「うー、どうしよう…今日残業か…？」

唸る蓮美をよそに、時計は針を進め昼休みはだんだん短くなつていく。その時、バッグの中で携帯が震え、蓮美は表示された名前を見た。

『メール受信 父』

父からメール、珍しい、と蓮美は呟いた。蓮美の父は小さな会社を経営しており、大学を出てすぐのときは、蓮美も事務の仕事を手伝っていたことがあった。が、人件費削減、ということで、蓮美は自らの会社に就職すると申し出た。そうすれば、誰かが会社に残ることが出来ると考えたからだ。それに、少し離れたところにも就職出来れば、家を出る口実にもなる。蓮美の両親は、女の子の一人暮らしは危ないと、大学に入ったとき、下宿はさせてくれなかった。それに関しては、蓮美もこれ以上金銭面で負担はかけたくない、ということでは納得していた。そして、蓮美は就職してから一年後、それまでも貯めていた金で、駅に近いが築35年の石造りのアパートを借りた。それは今でも蓮美の住まいである。

『今日、帰つてきなさい。』

件名にそれだけ書かれ、本文は何も書いていない父らしい簡素なメールに、蓮美は、了解、とだけ返信した。父がメールしてくるということは決して世間話をしたがためでないということを、蓮美はよくわかっていた。

(でも、なんだろう...)

あまり深くは考えず、蓮美は食堂へ昼食をとりに向かった。

「たーだいまー」

会社を出てからコンビニでビールを買い、そのまま実家へ向かった蓮美は、玄関の扉をあけた瞬間、リビングから聞こえてくる談笑に首を傾けた。

（……………お客さん？……………なんか、嫌な予感。）

そろ　そろ　とリビングへ通ずる扉にへたりとへばりつき、中の会話を聞き入った。

「——いやー、それにしても、永岡君は案外積極的なもんだな！あんな堅物に自分からアプローチに行くとは！」

誰が堅物かつ！と思わず叫びそうになったが、そこはぐつところえ、やつぱり…と蓮美は肩を落とした。どうやら、例のお見合い話は、未だ根強く残っているらしい。

「やはり、間に誰かを挟むと、僕の気持ちが蓮美に曖昧にしか伝わらないと思ひまして。社長と奥さんのお心遣いはありがたいのですが、蓮美には真っ正面からぶつかってみたいと思います。」

永岡の言葉に続き、父親の笑い声が聞こえてきた。普段は中途半端に寡黙な蓮美の父がこれだけ笑っているということは、間違いなく酒があると蓮美は思った。そして、自分の左手にはビールの入った袋がある。血は争えないと蓮美は密かに頂垂れた。

それにしても、永岡の言葉尻を拾うなら、どうやら彼は蓮美に本気で気があるらしいと、経験値の少ない蓮美でもなんとなくわかった。うちみたいなちっさい会社をものにしようなんてそんな小物で収まるような男でないということも蓮美にはわかっていた。

そう考えると、少し頬が熱くなってくるが、蓮美には結婚願望が毛

ほどもなかった。

「……それにしても、蓮美は遅いですねえ……」

母のやんわりとした声が聞こえ、自分が主題に出たことにもびくつと驚いた。

「私、電話してきます。」

やばい、と蓮美は思った。なぜなら、家の固定電話はリビングの扉を出たところ——つまり、蓮美の後ろにあるわけだった。

一連の会話を、聞きやってられっか！と蓮美は玄関の扉の外へ静かに、且つ素早く移動し、間一髪母と鉢合わせを免れた。

「——ふう。」

外へ出た蓮美は、ぬるい空気を肌で感じながら、実家から早足で離れた。その時、前の方から石焼き芋屋がやって来ており、香ばしい香りが蓮美の鼻をついた。今日の夕飯は焼き芋にしようかなと考えた時、蓮美は携帯が震えるのを感じ、母からの電話に出た。

「もしもし。」

『あ、蓮美？あんた何してんのさっさと帰ってきなさい！せっかくあんたの好きなビーフシチュー作ったのに。』

しまった、今日はビーフシチューがあったのかと蓮美は後悔した。母の作るビーフシチューは蓮美の子供の頃からの大好物であり、二

日目にはシチューではなく、ハヤシライスもどきにして食べるのが蓮美流でもあった。しかし、母の口から永岡健介の名前が出ないことから、やはり思惑があって呼び出されたと確信し、蓮美はビーフシチューを諦めることにした。

「ごめん、ビーフシチューは惜しいけど、仕事終わなくて。」

電話の向こうから、母の不貞腐れる声が聞こえた。しかし、仕事なら仕方ないと母が折れかけたその時、

「いしやゝきいもゝおいもゝ」

スピーカーからおっさんの芋ソングが流れ、母の声色が変わった。

「……………あら？電話からも外からも……………あんだ、今、どこにいるの？」

やばい、と思った。しかも買って欲しそうにおっさんはスピーカー蓮美の方へ向けた。そして、母が全てを察した。

「……………お芋、四個買って、三分以内に帰ってきなさい。」

全身におっさんの視線を感じながら、蓮美はその場に立ち尽くしていた。

「あら、お芋六個入ってる。」

「……おっちゃん、おまけしてくれた。」

佐倉家のリビングで、蓮美はソファに腰かけていた。隣にはお芋を嬉しそうに頬張っている母・和美。右側にある一人用ソファには猫舌を全力で発揮している父・晴雄。そして、正面にはお芋をもアクセサリーにしてしまう、好青年・永岡健介。先程、逃げようとしたところを、すっかり母にバレてしまい、こってり…とは言わないが、ほどほどに叱られた蓮美は、すっかり嫌なメンバーに萎縮してしまった。

「蓮美さんの買ってきてくれたお芋、とても美味しいです。」と、すかさず空気を和ませてくる永岡は、蓮美が実母に叱られているところを、やんわりと止めに入ってくれたのであった。初対面同然の人に、恥ずかしすぎる姿を見られてしまった蓮美は、永岡の顔が見れずにいた。

ビーフシチュー食べたいなどとは言い出せず、本当に焼き芋を夕飯にした蓮美であったが、永岡が帰ったら食べようと密かに計画していた。

「——蓮美さんは、お酒が大好きみたいですね。」

「え……」

これ以上醜態はさらせん！と思った蓮美は、すかさず弁解しようとしたが、それよりも早く、母が口を開いていた。

「そつなんですよ！この子ったらどこで覚えたのか知らないけど二十歳になったときから酒浸りの生活で！毎日ビール買ってくるわお

父さんのウイスキー飲み干すわで酒代も馬鹿にならないんですよ！
この前この子のアパート行ったときなんて、休日だっていうのに部屋で一人酒やつてるんですよ！別に特別強いわけでもないのに、寧ろ弱いのに！それにカクテルとか女の子が好きそうな甘いやつよりも、ビールとか焼酎が好きなんですからもうおっさんみたいなお子なんですよ！それにろくに包丁も持ったこともなかったのに、お酒に合うおつまみを自分で作るために、今ではすっかり私よりも料理上手なんですよ！」

母ああああ！！！！なんのフォローにもなっていない！それどころか貶してる蔑んでる！本当に見合い成功させる気あんなのかこのおばさん！別に成功させたくないけど、なんでこんなに乏しめられてんだ私！ていうか酒一つでこんなに人をこけに出来るのか私の母親はあああ！！！！

自業自得と言ったらそれまでなのだが、蓮美の心の叫びとは裏腹に、顔は真っ赤にして伏せていた。しかもそれを見た母が、「何あんた顔真っ赤よ？もうお酒のんでんの？」と畳み掛けてきた。

（んなわけないだろこのバカおかん！今日私が飲むはずのビールはさっきあんたが冷蔵庫に入れただろうが！）

言い返したいが言い返せない状況の中、永岡のテノールの声が聞こえてきた。

「蓮美さんは料理がお上手なんですね。僕もずっと一人暮らししますが、料理の腕だけは学生の頃から上達の兆しが見えないんですよ。是非一度ご相伴に預かりたいですね。」

母の貶しをものとしめない永岡のフォローに蓮美は紅いのも忘れて顔を上げてしまった。永岡は先程となんら変わらない笑顔で蓮美のことを見つめていた。

「う…いえ…そんな、もったいないお言葉デス…」

素直に嬉しいと思ってしまった蓮美は、緊張で片言になってしまったことに、またゆるゆると顔を下げた。蓮美の記憶の上では、同僚でも友達でも、蓮美の酒豪っぷりを聞くと、だいたいは引いてしまい、線を引かれていた。逆に、そこで引かないやつは下心ありありのやつということはわかっていたが、永岡の言葉からは一切下心は感じられず、蓮美は頬を染めた。

「それに、僕もお酒は、あまり強くはないですけど好きですよ。」

永岡の優しい声色に、蓮美は、そうなんですかと呟くことしか出来なかった。その時、全く空気を読めない父が、口を挟んできた。

「なんだなんだ蓮美！真っ赤じゃないか！永岡君に気があるなら、すぐにでも話を進めろ！」

家庭内セクハラで訴えるぞおっさん！と、言いたかったが、例によってそんなことは出来なかった。永岡に気があるなんてこの場にいた全員に勘違いされたら、蓮美の発言権はないも同然なのであった。慌てて否定の言葉を口にしようとしたが、それは永岡によって遮られた。

「社長、蓮美さんにとったら、僕はまだ会ったばかりの男ですから、そんなことはありませんよ。それに、これから僕が時間をかけてア

ブローチしていきますから、気まづくなってしまうないように願います。」

決してそれは嫌味なのではなく、分別ある大人の男の対応だった。父が悪い悪いと謝る傍ら、負けじと母が口を挟んできた。

「でも健介君、時間をかけてだなんて、この子ももういい年だし、私たちだって孫はたくさん欲しいわっ！」

家庭内セクハラパート2！なんだ孫って！話飛躍しすぎだろ！

流石の永岡も、苦笑いを浮かべ、子どもは僕も早く抱いてみたいですねと言った。

それから蓮美にしてみればはらはらな時間はだんだんと過ぎ、時計の短針が11を回った辺りで母がはっと立ち上がった。

「あらやだ、もうこんな時間。ごめんなさい健介君、明日もお仕事があるのにこんなに話し込んで。」

蓮美は内心、母の言葉にほっとしていた。確かに自分も永岡も明日は仕事があるため、父といえどこれ以上は引き止めないだろうと踏んでいた。その予想は外れることなく、永岡も和美の言葉に答えていた。

「いえ、僕の方こそ、平日に長居をしてしまい、申し訳ありません。みなさんとお話するのが楽しくて時間を忘れてしまいました。」

後半の言葉を言いつきは、永岡の視線は完全に蓮美に向いており、気まづそうに蓮美は会釈をするだけだった。が、これでやっとビー

フシチューが食べられると安堵した蓮美であった。

「それじゃあ蓮美、あんたも気をつけて帰りなさいよ。」

(……………ん?)

「ああ、蓮美さん、よろしかったら僕がアパートまでお送りしますよ。女性の夜の一人歩きは危ないですからね。」

(……………え、あれ?)

「あらっ！やだもう！健介君ったら本当に紳士なのねえ。よかったわね蓮美、お言葉に甘えなさい。その方が私たちも安心だし。」

ヤバい展開になってきたと蓮美は感じた。このままだと、自分は永岡とともに帰宅し、ビーフシチューにはありつけないということになってしまう。

「いやいや、蓮美だってせっかく久しぶりに帰ってきたんだし、今日くらい泊まっていったらどうだ？」

という晴雄の珍しい提案に、蓮美はすかさず乗っかろうとした。しかし、蓮美は見ていた。そう言った瞬間に母によって物凄い眼光に射ぬかれた父の姿を…

「…む、いや、そうだな。母さんと永岡君の言う通りだな。蓮美、せっかくだから送ってもらいなさい。また今度帰って来たらいいだけの話だしな。」

味方は一瞬で敵に寝返り、蓮美に抵抗が出来るはずもなく、永岡と蓮美は連れ立って佐倉家を後にした。

……………嗚呼、ビーフシチュー

4・お酒と私と惑いと誘い

「……あ、永岡さん、車だったんですか。」

「はい、もともと蓮美さんをお送りするつもりでしたので。」

永岡の言葉にえ？声を発した蓮美は、永岡の顔を見上げた。永岡は口が滑った、と言わんばかりの仕草を見せ、すぐに照れたように蓮美に微笑んだ。

(…わざと、なのかな。それとも天然のタラシ？)

恐らく後者だと考えつつ、蓮美は永岡のエスコートのもと、車の助手席に乗り込んだ。

走り出した車の中はまるで雪の中にいるかのように静かだった。さつきまでは饒舌だった永岡も黙ってしまい、蓮美はちらりちらりと永岡の様子を伺った。その横顔は大人の男そのもので、惹かれる、というわけではないが、整った容姿と紳士な姿勢は、こういう扱いの慣れてない蓮美の胸をときめかせるのには充分だった。

高そうだなと安易な感想を車に抱きつつ、蓮美は少し顔を俯かせてふかふかのシートに身を任せた。実家からアパートまでの距離は歩くには遠く、いつもは電車を使っているのだが、車なら30分くらいかなと適当な目安をつけた。

「……それは、癖ですか？」

静かな車内に聞こえた声に、蓮美は重たくなりかけた瞼をはっと開けた。

永岡を見ると、彼は変わらず前だけを見ており、話しかける相手は自分しかないが、本当に今言葉は自分に発せられたのかどうか不

安になってしまった。

「あの、それって？」

緊張してるなあ、と思わず思ってしまうような声色だった。永岡はそんな蓮美を解すようにふっと口元を緩ませた。

「ああ…それ、じゃわかりませんよね。すいません。」

「いえ…そんな、」

「それ、っていうのは、その、顔を俯かせる仕草のことです。さつきもそうだったから、そうなのかなって思いました。」

そこでやっと、蓮美は永岡に対して失礼な態度を取っていたのではないかということに気付いた。手を振りながら、自分でも何を言っているのかわからなくなってるような弁解をした。

「いやっ、その、ごめんなさい、変な態度とってしまって、これは、その、癖とかじゃなく、なんというか、自己防衛？いや違う、そうじゃなくて、俗世間との隔離というか、逃避というか、何言ってるんだ私、えと、これは…」

吃りを極めかけた蓮美の耳に、永岡の吹き出す音が聞こえた。見ると、さつきまでとは全然違う、少年のような笑顔で、永岡は変わらず前だけを向いていた。

「あはははっ、そんなに、緊張しなくても…っ何言ってるか、わかんなくなっちゃってるじゃないですか、」

ツボに入ってしまったらしく、永岡が笑い止むことはなかった。そんな屈託のない笑顔に、永岡は蓮美の両親の前にいるとき、少な

らずでも演じていたことを察した。当然のことなのだが、蓮美はさつきまでの永岡を自然体だと思い込んでいた。

「っ…そんなに、笑わないで下さい。」

消え入りそうな声で言う、自分の大人しさに、蓮美は心の中でわけがわからないと呟いた。

「ああ……はは……すいません。蓮美さんには初めてあったときから、冷静で落ち着いている印象があつたので―昨日会ったのかも―ですから、慌てる蓮美さんが、可愛らしくて。」

可愛い、と面と向かって言える男は、軽率だと思う節があつた蓮美だが、永岡の言葉はそのようには聞こえず、素直に受け止めて照れている自分が恥ずかしい蓮美だった。

「……僕に言い寄られるのが嫌だから、背けていたわけではないのですね？」

そう言った永岡の声は今までのどの声色とも異なり、大人の男らしさの中に、不安と寂寥が入り交じっていた。一瞬、何を言われているかわからなくなった蓮美だが、すぐに言葉を発した。

「……いえ！そんなことは全くありません！」

さつきまでと打って変わって大きな声をあげる蓮美に、永岡は虚をつかれたように驚いたが、すぐにいつもの微笑みの中に、安堵を含んで浮かべた。

「……さつき、僕もお酒が好きだと言ったでしょう？会社の近くに、

お酒の美味しいお店を知っているです。…よかったら、週末にでも一緒にしていただけませんか？」

蓮美の言葉には何の答えもなく、永岡はいつもの余裕を取り戻したように言った。

男と酒を飲むと、自分がどうなってしまうか、蓮美はよくわかっていたはずだが、自然に首は頷いており、小さな声で、はい、と答えていた。

静かな車内に、それは十分に浸透し、隣にいる永岡は少し頬を赤らめてはにかむように笑んでいた。

蓮美の頭の中は、気付いたらビーフシチューそっちのけで、永岡の車の香りと永岡自身でいっぱいだった。

アパートの前で蓮美を降ろした永岡は、ここでいいと言う蓮美を振り切り、部屋の前まで来ていた。

「あの…今日はありがとうございました。…送っていただいて。」

へこ、と頭を下げた蓮美は、とく とく と鼓動する心臓を全身で感じていた。いっぱいっぱいの蓮美とは異なり、永岡は余裕の笑顔でそれに応えた。

「…いえ、僕もお話できて楽しかったですから。昨日の今日で、急かすような真似をして、すいませんでした。」

急かすって、何をだろう、と思った蓮美だが、深くは考えないことにした。

「あの、よろしかったら、お茶でもいかがですか…？」

100%社交辞令だった。すでに時間は0時前であり、こんな時間にこんな誘いをすることは、常識的にありえないことだが、バカな女と思われても、永岡が断ることは蓮美にはわかっていた。

「――、是非。」

「！え、」

「と、言いたいところですが、蓮美さん。こんな時間に社交辞令でも男を自室に誘うのは感心しませんね。僕じゃなかったら間違いく上がり込みますよ。――明日がもし休日なら、俺だってお邪魔しますからね。」

そう言った永岡の顔は、今までの紳士的なものとは違い、男の顔だった。怯んだ蓮美を見た永岡は、それでは失礼します、と一瞥して帰って行った。

――俺、って言った。

そんな永岡の背中を見送り、蓮美は部屋の中へと入った。

5・ギャルと心と電波時計

「せんばあい、なんか最近うきうきしてませえん？瑠璃い、先輩からピンクいオーラを感じちゃうんですけどお。」

自他共に認める人の色恋大好きっ子のデスクが隣の新人、春日井瑠璃は今日も化粧のノリが絶好調である。仕事中也キャピキャピしてて、社会人にあるまじき姿ではあるが、周りは中年の親父が大半で、皆鼻の下を伸ばしきっているの、特に問題はないらしい。時たま入る女性の若い子は、社内では瞬く間にアイドルとなる。蓮美も、入社当時はわいのわいのとアイドルにされかけたが、そのくそ真面目でお堅い性格は、5、60過ぎの中年には受け入れられなかった。

「……いや、ニヤニヤなんて、そんなことないよ。」

平静を装おってはいるが、自分の中に少し胸を弾ませている自分がいることは、うつすらと自覚していた。今日は木曜日。永岡と酒を飲もうと約束した日の前日であった。

（…別に、好きとかじゃなく、単にイケメンと一緒にいるのが新鮮で楽しいだけだもん。ニヤニヤなんてしてない！）

自分にそう言い聞かせて、蓮美は大人なクールな女性を装おった。

「そんなことあるあるうー！だって先輩、ずうつと携帯気にしてるんだもん！誰かからのお、メール、待ってるんじゃないんですかあ？」

なんでこの子はそんなとこまで見てるんだ！と隣のギャルが少し怖

くなつた蓮美だが、現に携帯を意識していることは自分でも自覚してたので、否定出来なかった。

蓮美はあの日、永岡と連絡先を交換し、時々他愛ないメールのやり取りをしていたのだった。

「いやっ、ただ早く昼休み来ないかな〜とか終業時間こないかな〜って時計見てただけだから。」

「そんなのそこに掛かつてる時計みたらいいじゃないですかあ！今をときめく電波時計ですよ！先輩の古くさい携帯なんかよりよっぽど正確なんだからあ！」

びしつと壁掛け時計を指差す瑠璃は、先輩に対する態度とは思えない暴言であつた。

「そこまで言うかつ……確かにちよつとずれてるけど。」

蓮美の言葉に斜向かいのちよつと頭部に違和感のある年配社員がびくつと肩を震わせた。

「むうっ、はつきり言ったらどうなんですか！男からの連絡待つてるって！」

声がかーいと思つた蓮美だが、慌てて否定するとそれは肯定を意味するものなので、冷静に、冷静応えた。

「……瑠璃ちゃん。あんまり大きな声出さないの。携帯は別にメール待つてるとかじゃないし、私にそういう人はいないの。……ほら、仕事なんだから私語は慎む。」

ぴしゃりと言いのけ、瑠璃は不満そうに　はあい　と返事をし、パ

ソコンに向かいあつた。一瞬騒然としたオフィスは、蓮美の言葉によって沈静された。

蓮美は内心でガッツポーズをし、自分の対応に満足しきっていた。

それもこれも、全て無駄になったのは、蓮美が瑠璃と一緒に会社を出た五時半のことだった。

「きゃあ〜っ、先輩先輩っ、すごいイケメンですよ！やだこっち見てる笑ってるう！」

きゃあ〜 と蓮美には一生出せない黄色い声を蓮美は右から左へ素通りさせ、頭の中には 何故 という言葉とクエスチョンマークが行き交っていた。

蓮美の小さな会社の前に、見覚えのあるクラウン。その横に佇む姿には、見覚えがある、なんてレベルではなかった。

「——蓮美さん、お帰りなさい。」

永岡健介、此处に在り。

「へえ〜っ、永岡さん東西商事にお勤めなんですかあ？すごいエリートさんなんですねえ！」

蓮美や会社の人間と話するときよりも1、5オクターブくらい高い声で、瑠璃は永岡に得意のマシンガントーク＋質問攻めをしていた。永岡の車の後部座席に乗り込んだ蓮美と瑠璃は、まるで正反對の姿勢でいた。蓮美は、二人の会話を聞きながら石のように硬直し、ただただ黙っていた。

「そんなことはありませんよ。僕よりも出世している同期はいっぱい居ますしね。」

「でも、その若さで部長さんなんでしょう？東西商事での部長さんなんて、うちの会社の部長とは天と地ほどの差がありますよお！」

「そんなことはありません。お二人の会社はとても仕事が丁寧で、確實だと誰もが言いますから。」

そんなことないでしょお」と猫なで声の瑠璃は、車を運転してなかったら永岡に飛び付きそうな勢いである。

『今日は早く仕事が片付いたので、サプライズです。送らせていただいても構いませんか？』

会社の前でそんなかしづくような態度を蓮美に対してとる永岡に、瑠璃のテンションはピークに達していた。

『いや、あの、でも、今日は後輩の子もいますし…』

瑠璃の存在が断る理由としてまかり通るとは到底思えなかったが、

何も言わずにいるわけにはいかない蓮美だった。

『もちろん、お二人ともお送りしますよ?』

その後は蓮美が何かを言う暇もなく、ピークをさらに越えようとする瑠璃が、ありがとうございますう、とその場をまとめてしまい、今に至るというわけである。

「――みさん…蓮美さん?」

永岡の蓮美を呼ぶ声に、はっと我にかえった蓮美。永岡は変わらず前を向いているが、時々ルームミラーで蓮美の様子を伺っていた。

「あつ…ごめんなさい、ぼーっとしちゃって…」

そんな蓮美の様子を見た瑠璃が、ころころと可愛らしい笑顔で言った。

「大丈夫ですかあ?…それにしても私、知らなかったな!。先輩にこんな素敵な彼がいたなんてえ。」

蓮美が、え?と思った時には、瑠璃はどんどん語っていった。

「最近だつてえ、永岡さんからの連絡待ってたんでしょ?瑠璃、先輩のこと好きだから、様子おかしかったら気づくもん。今日だつてあんなに否定しちゃって、先輩ったら照れっちゃって可愛い!」
「る、瑠璃ちゃん!」

蓮美が声を発した時には全てが遅く、瑠璃はしてやったり顔、永岡は驚いた顔をしていた。

必死な態度が、イコール肯定だということはわかっていたのに——
蓮美の心はなんとか弁解しないと、という気持ちでいっぱいだった。

「——あ、永岡さん。瑠璃、そのマンションの前で降ろして下さい。
あい。」

「……え、そこでいいの？」

「はい、なんかあ、先輩弄ってたら、私も彼に弄られなくなっちゃいましたっ」

語尾にハートマークがつきそうな甘い声と、最悪な下ネタに、永岡も苦笑いするしかなかったが、それさえも瑠璃の計算だということは、二人には永遠にわからないだろう。

「——じゃ、今日はありがとうございましたあ。先輩っ、また明日！おやすみなさいっ」

最初から最後までキャピキャピしていた瑠璃は軽い足取りで大きなマンションに入って行った。

車内で二人きりになった蓮美と永岡はどちらも口を開くことなく、ただ黙っていた。

「——明日、楽しみにしています。…迎えに行きますから、待っていて下さい。」

蓮美のアパートの前に車をつけた永岡は、そう言い、今日は部屋の前まで送ろうとはしなかった。その代わり、蓮美がアパートに入ってその姿が見えなくなるまで、ずっと熱い視線を蓮美に向かって投げ掛けていた。蓮美はそんな永岡に気付きながらも、振り返るけとはなく、足早に永岡の前から姿を消した。

——部屋に入ると、蓮美はどくどくと全身を血が駆け巡るのを感じ、心臓の辺りをぎゅっと掴んだ。

——顔が熱い。胸も熱い。

——ああ、そっか、私——

蓮美は、胸に彩られた気持ちに名前をつけようとはせず、その日はシャワーを浴びたあと、すぐにベッドに潜り込んだ。枕元で充電していた携帯に目をやると、スカイブルーに設定してあったライトが点灯していた。メールの受信を知らせる色である。

『From 永岡健介

おやすみなさい。』

たったそれだけの文章に、蓮美は頬が緩むのを感じた。——今夜は
きっと良い夢が見られる、と蓮美はそっと目を閉じた。

6・恋の仕方と揺れる青

「……ええ？何もなかったんですかあ？」

見るからに見下した視線を向ける瑠璃に、蓮美は食べてたタラコパスタが器官に入ってむせた。瑠璃はチャラチャラした容姿には似つかわしくないとされる『ガッツリ 漢井』と称されるＬサイズのだんぶり鉢をランチとしていた。二層ご飯に、唐揚げ、キムチ、軟骨、ソーセージ、目玉焼き、マヨネーズと特性デミグラスソースで彩られた丼は、見てるだけでお腹いっぱいになってしまう。

「……瑠璃ちゃんって、デートとかでもそういうの食べるの？」

「まっさかあー。デートだったらフレンチにイタリアン、高級和食からホテルのバイキングまで、出すとこ出してもらいますう。」

そつたろうなと思いながら、蓮美は目の前のパスタを無理矢理口に詰め込んだ。この食獣は、ちょっとでも人が食欲のない素振りを見せると、すぐに手を出してくるような節操のなさである。

「……んー、でもあー、私昨日ちゃんと帰り際に煽りましたよねえ。なんですかあ、いい年してプラトニックですかあ？」

煽ったというのは、あの去り際の下ネタのことを指していることに蓮美は気が付いた。蓮美に酒でも入っていたら、全ては瑠璃の思惑通りになっただろうと思うと、蓮美は悪寒を感じずにはいられなかった。

「……別に、付き合ってるわけじゃないんだから、そんなことはありません。」

「何それおばはんみたい！」

誰がおばはんかつ！と、パスタを巻き付ける手に力を込めながら、蓮美は黙々と食べ続けた。

「あつ！でもお…今日もいらっしやるんですね、永岡さん。」

ニヤリ と口角を吊り上げた瑠璃は、これがあつたと言わんばかりに微笑んだ。

「ごほつ！…うつ…な、なんで、げほつ！知つ…」

「やだあ先輩乙女失格うゝ、おっさんみたいにむせないで下さいっ」

質問に答えろと言いたいが、変なところに入った麺は思う通りに抜けてはくれなかった。

「昨日車の中で私聞いてたじゃないですかあ。もうっ、先輩本当にぼーっとしてたんですね。」

「見てたらわかったでしょ…」

「いいえっ、てつきり仲良く喋る私と永岡さんに嫉妬してるかと思いましたあゝ」

（……なぜ。）

「二人の黙したラブにあてられて、私も昨日は彼と存分にいちやらしましたあ。」

「…あー、今は、なんだ、青年実業家？だっけ。」

「はいっ！優しくてかつこよくて背が高くてお金あって、そして何より…巧い！」

「……そうですか。」

相変わらず理想が高い子だと蓮美は思った。

恋多き瑠璃は、社会人になってからは恋人に、ルックスだけでなく経済力も求めるようになった。夢ばかり見てるようなふわふわした男には一ミリもときめかなくなり、一度、まさか相手に妻子がいるとは思わず、不倫しかけたことがあった。が、不倫浮気はご法度と考える瑠璃は、それに気付いた瞬間、男の顔面に鉄拳を繰り出した。

「サトシくんはとっても紳士なんでえ、浮気なんてあり得ません！
ついに私も念願の寿退社！」

先輩お先ですう、と、別に結婚話が二人の間で出たわけでもないのに瑠璃は舞い上がっていた。

瑠璃は見た目の派手さから、男からは遊び相手として見られることが多かった。もちろん、本人にそんな気は全くなく、いつでも本気、つまり、いずれは相手と結婚するつもりで付き合っていた。

「……うん、念願叶うといいね。」

そんな瑠璃の幸せを、蓮美は願っていた。決して小うるさいだけではない後輩を、蓮美は可愛がっていた。時々腹がたつともあるが。

——その後も話は瑠璃ののろけ話に留まり、二人は昼休みギリギリまで食堂で語りあっていた。

終業時間が20分ほど過ぎた頃、蓮美は更衣室で着替えていた。いつもなら下はパンツやジーンズなのだが、今日、蓮美の手の中にあるのは膝丈の淡いブルーのグラデーシヨンのスカートだった。

もちろん、理由は決まっていた。

（……いや、別に、気合い入れたとかじゃなくて、永岡さんが案内してくれるお店なら、きつとオシャレなバーとかだろうから、お粗末な格好じゃダメだと思ったからで……）

…未だ自分の気持ちに踏ん切りがつけられない蓮美であつた。

（だってまだ会って一週間も経ってないし！…で、私は誰に言い訳を……）

そしてまた、言い訳違つ！真実！と首を振り、

（…永岡さん、何か言ってくれるかな…）

乙女回路全開にしていた。

『From 永岡健介

件名 ごめんなさい

部下がトラブルを起こして会社から出られなくなってしまいました。何時に社を出られるかわからないので、今日の約束を、私の勝手な都合で破ってしまうことを、どうか許して下さい。私からお誘いしたのに、本当に申し訳ありませんでした。』

着いたのかな、と思って開いたメールだったが、その内容は180

度違ったものだった。更衣室を出たところだった蓮美は身体の芯の力が抜けるのを感じた。

『T O 永岡健介

件名 n o t i t l e

お疲れさまです。お仕事なら仕方ないので、私のことは気にしないで下さい。しっかりお仕事片付けて、週末はゆっくり休んで下さい。それじゃあ、おやすみなさい。無理しすぎないで下さいね。』

メールが送信できたのを確認し、蓮美は電源を切って携帯をバッグの中にしまった。

自分の馬鹿さつぷりに頭と胸から熱が抜けていくのを感じた。永岡はあの年で部長までのしあがり、エリートコースまっしぐらだ。そんな男が、自分のような一〇しよりも早い時間に上られるはずなど、普通に考えて有り得なかった。昨日だって、無理して終業ぴったりに会社を出たに違いなかった。そして、そんなツケが今日に回ったと考えるのは、とても自然なことだった。

(……迷惑、かけてた。)

ショックだった。自分なんかのために、どれぐらいの規模かわからないが、東西商事なんて会社に与えてしまったこと。永岡のこれらの人生の邪魔をしてしまったこと。

最も、昨日は本当に永岡が仕事を早く終わらし、今日のミスはあくまでも部下個人の責任だとしても、その責任を被るのは上司である永岡に違いなかった。

会社を出た蓮美は、ひらひらと揺れるスカートを見ながら、舞い上

が
つ
て
い
た
自
分
が
と
ん
で
も
な
く
陳
腐
な
存
在
に
思
え
た
。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1358m/>

青い空と彩る心

2011年10月7日10時36分発行